

昭憲皇太后の女官「かよ」おばさんの話

昭憲皇太后が大正3年(1914年)に亡くなられて、千駄ヶ谷葵橋の増田家に「かよ」おばさんが帰って来た。女官として宮中に上がり、主が亡くなったので永の暇となったのだった。

「おかよ」おばさんは、昭憲皇太后の形見分けとして「足袋」をいくつも携えて帰って来た。

「足袋」は小さかったという。増田の家の女どもの足にあわせてみても、誰も履けそうにない程に小さかったという。故に「美人は足が小さい。」「足が小さければ美人である。」と増田家には伝わっている。

この話はこれ切りである。その後の「おかよ」おばさんの消息を筆者は聞いている。

だが、明治末年は千駄ヶ谷葵橋の増田家の借家に「平民社」が置かれたころであり、明治43年(1910年)に大逆事件の検挙が始まり、翌明治44年、幸徳秋水や菅野スガらが刑場の露と消えた。

そのような時代に、何ゆえ三代目増田金太郎の娘が皇后の女官となり得たのであろう。四代目増田謹三郎がキリスト教に転向(妙な言い回しではある。)する前の明治の早い時期に宮中に上がったのは想像できるが、明治末年にこのような縁者が宮中に仕えたことが不思議である。

(増田 信敬 2008. 7. 21)

(参考文献=架蔵本)

- ・ 「菅野すが」 絲屋寿雄著 1970年岩波書店(岩波新書)

Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved

<http://soumokukihinkagami.com/>